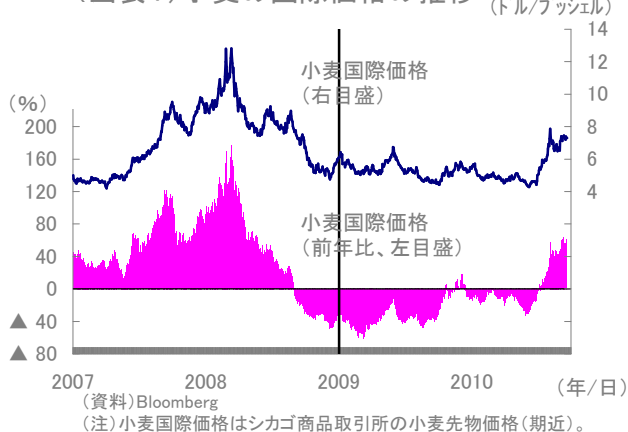


小麦価格上昇がCPIに与える影響

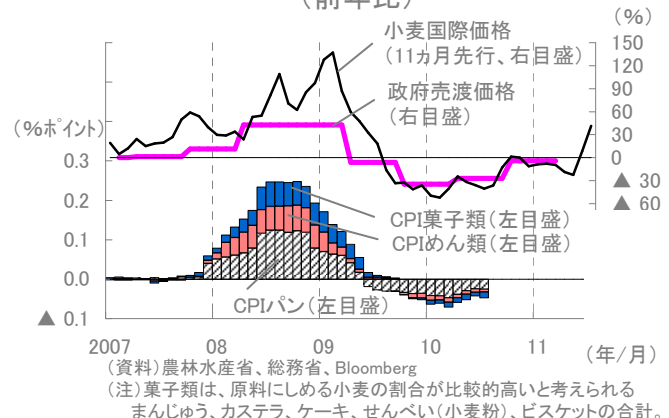
～2008年と比べ押し上げ効果は限定的に～

- (1) 小麦の国際価格が上昇し、1ブッシェル＝7ドル前半で高止まり（図表1）。天候不順による減産が広がるなか、8月初旬のロシアの小麦禁輸措置を契機に供給懸念が強まったことが背景。
- (2) 2007～08年の小麦価格の高騰局面では、わが国政府による製粉会社への売渡価格（注）は前年比40%上昇。その後、パン、めん類の価格は急上昇し、消費者物価（CPI）を0.2～0.3%ポイント押し上げ（図表2）。今回も小麦価格の上昇がCPIを押し上げるとの懸念も。
（注）わが国では政府が小麦輸入をほぼ一元的に管理しており、過去半年間の平均買付価格をベースに売渡価格を決定。
- (3) もっとも、小麦関連メーカーのコスト構造を比較すると、前回と今回で以下のような違い。
①2007～08年は小麦価格の上昇が2年近く続いたほか、ピーク時の上昇率が150%を超えたのに対し、今回の上昇はまだ数ヵ月で、上昇率も50%程度にとどまっていること。
②2007～08年は小麦以外に原油や大豆などの価格も高騰したのに対し、足元では小麦以外の原材料価格は総じて落ち着いていること。
この結果、08年は小麦関連メーカーの投入コストが上昇し、コスト吸収力が低下していたのに対し、今回は投入コストがまだ下落傾向にあり、コスト面で余裕がある状態（図表3）。
- (4) 以上を勘案すると、足元の小麦価格上昇がCPIに及ぼす影響は限定的と判断可能。ちなみに、小麦の国際価格が横ばいで推移した場合、売渡価格は2011年4月に2割上昇の見込み。これが完全に転嫁されたとしても、パン、めん類の価格上昇は1%にとどまり、CPIの押し上げは0.02%ポイントに（図表4）。

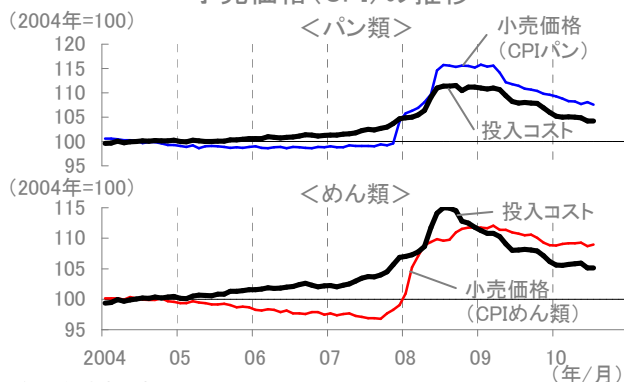
（図表1）小麦の国際価格の推移



（図表2）小麦価格と小麦関連品目のCPIへの寄与度 (前年比)



（図表3）パン類、めん類における投入コスト(試算)と小売価格(CPI)の推移



(資料) 経済産業省、日本銀行
(注) 投入コストは、産業連関表を基に、財については製造業部門別投入物価指数における食料品部門の投入物価指数、それ以外の内生部門については企業向けサービス価格総合指数を用いた。粗付加価値額は一定と仮定。

（図表4）輸入小麦価格20%上昇がCPIに与える影響(試算)

関連産業	価格上昇率(%)
製粉 <26.9>	5.4
飼料 <0.8>	0.2
調味料 <0.4>	0.1

<>内は価格に占める輸入小麦の割合

関連産業	価格上昇率(%)
パン類 <18.6>	1.0
めん類 <19.0>	1.0
菓子類 <3.3>	0.2

<>内は価格に占める製粉の割合

CPIへの影響 (寄与度、%ポイント)	0.02
---------------------	------

(資料) 経済産業省「平成19年産業連関表」を基に日本総研試算
(注) 輸入小麦価格の上昇がすべて価格に転嫁されたケースを想定。価格上昇率は直接的な影響のみに限定して算出。